自然と共に

沖縄県立開邦高等学校一年 與座 菜々果

潮の香りを乗せた風が静かに頬をなでる。耳を澄ませば波の音、鳥のさえずり、木々のざわめき。すべてが穏やかな日常の美しさを歌っていた。

けれどその風景の中に、目には見えない「記憶」が確かにあった。私が立っているのは、糸満市、平和祈念公園。かつて地獄と化した激戦地。ほんの八十年前、美しい島は涙と絶望で覆われていたのだ。

終戦から八十年という節目を迎えた今、改めて平和を学ぶべく私は平和祈念資料館を訪れた。

一步踏み出すと、そこには教科書の中でしか見たことのない未知の世界が広がっていた。必然的に目を背けたくなった。なぜなら、我が故郷で繰り広げられた残酷な事実を、信じたくなかったからだ。沖縄は今も昔も美しい。そう信じていたかった。とある少女の遺品を見るまでは。

数多とある展示物の中でも、特に心を奪われたのは少女の日記。そこに描かれているのは、私と同じように笑い、泣き、夢を抱く人々の姿。

そっと目を閉じた。どうしてこんなにも理不尽な悲しみが、ひとつの島に押し寄せたのだろうか。どうして多くの夢と笑顔が、戦争という名のもとに踏みこじられなければならなかったのだろうか。言葉にさえならない私の問いが、一筋の涙となって頬を伝った。

しかし、悲惨な状況の中でさえ、私たちの先祖は怒りではなく祈りを選んだ。憎しみではなく希望を語った。彼らの願いを次へと繋ぐ架け橋となるのは、今を生きる私たちなのではないだろうか。過去を美化せず、平和を守り抜くことこそが私たちに課された義務なのではないだろうか。

炎天下の中、私は平和の礎へと歩を進める。暖かい風が石面をなでる。亡き人たちにそっと寄り添うように。

名前を一つ、声に出して読む。すると、ひとつひとつの石碑に刻まれた名前たちが、風の中を漂う声のように、私に語りかけてくる。

「生きたかった」

「家族と、もっと笑いたかった」

「この空を、もう一度見たかった」

そう。ひとつひとつの名前には、笑顔があり、家族があり、叶えられなかった夢があった。私は、そっと手を合わせた。

辺りを囲む木々の葉が、さらさらと音を立てて揺れている。風が吹く度に、命あるものすべてが応えるように震え、語り合っているようだった。

風の音、海の光、木漏れ日、虫の声。すべてが「今、ここに生きている」ことを教えてくれる。そして、「この瞬間がどれほど尊いか」を教えてくれている。

私はそっと腰を下ろし、空を見上げた。かつて、この空を見上げることすら叶わなかった人たちの分まで、私は今、生きている。

しかし、「戦後」がまだ続いていることを一体どれくらいの人々が知っているのだろうか。

今もなお「戦争の傷跡」として、沖縄に大きく残り続ける米軍基地。夜空を引き裂く戦闘機の音。消えることのないフェンスの影。

それでも、私たち沖縄県民は「平和を願う心」を手放さない。対話で解決できる日がくることを願って、私は今日も息をする。

日が傾き始めると、空はゆっくりと朱に染まり、海はその色を映して静かに煌いた。水平線の向こうに沈む夕陽は、世界中の痛みと願いを溶かしながら、そっと一日の終わりを告げている。

今も昔も自然はすべてを包み、すべてを静かに語り継いでいるのかもしれない。

平和とは、ただ争いがないことではない。誰かを傷つけることなく、誰かの幸せを奪うことなく、自然と共に穏やかに生きていけること。それこそが、本当の平和ではないのかと私は思う。

気がつくとき空が深く藍色に染まりはじめていた。風は優しく、どこか懐かしい匂いを含んで吹いていた。その風は、戦争の記憶を知っているのだろうか。私には知る由もないが、ただひたすら祈り続ける。

どうか、この海が、空が、森が、人の涙ではなく笑顔を映し続けますように。